闇桜

SugarChain

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
闇桜

【Ｎコード】
Ｎ１２６０Ｄ

【作者名】
ＳｕｇａｒＣｈａｉｎ

【あらすじ】
桜は誰も信じられない。愛せない。だって、そうなるだけの出来事があったのだから。愁は桜の安らぎとなるのか？

心の闇

もう死んだ方が楽だな。
離婚しても生活が出来るか分からない。
行くところもない。

なのに、、、なんで私は死ねないんだろう？

「おまえなんか死んだ方が良い。どこにでも行け。」

母から貰ったとても冷たい言葉。
宗教にのめり込んでしまった母。
一度は仕方なく私もその宗教に入ったのだけれど。
母の心がそれで和らぐならと思って入ったのに。
数年後に宗教を辞めた私に投げつけられたのはとても冷たい言葉。

お母さん、きっとあなたは元々壊れていたんですね。
壊れていたあなたから言われた言葉は今もまだ私を縛っています。

心の闇（後書き）

初めて小説を書きました。
最後まで読んで頂きありがとうございます。
誤字脱字等ありましたらお気軽にご指摘ください。
よろしくお願いします。

孤独の始まり

これが一番古い記憶だろう。
私は一人でレコードを聴いていた。
椅子を使って、自分の身長よりも高いレコードプレイヤーをセットして。
流れてくるのは「白鳥の湖」。
なぜそれを聴いていたのかは分からない。
ただ、イメージに残っているのはレコードプレイヤーの隣に立って一人でレコードを聴く自分。
部屋には誰もいない。

思えばこれが孤独の始まりだったのかもしれない。

次に覚えているのは祖母との事。
小学校の帰り道、ランドセルを背負ったまま私は自分の家の前を通り過ぎ、友達の家へ向かっていた。
そして、途中で買い物に出かけていた祖母に会った。
友達の分までお小遣いを貰い、祖母に勧められるままお菓子を選んでいた。
「桜ちゃんのお婆ちゃん、優しいね～。」
そんな言葉を友達に貰い、私も有頂天になっていた。
なのに、、、。
5分後には母が来た。
そして怒られて家へ連れていかれた。
祖母がお小遣いをくれたのは私を足止めするためだった。

そして私はまんまと騙されたのだ。
お婆ちゃんっ子だった私は騙されたことにショックを受けた。
大好きなお婆ちゃんが私に嘘をついた。
それがとても悲しかった。

もう少し大きくなった頃、別の友達が出来た。
ある日友達が、私の家の前の野原には結構お金が落ちていることがあると私を野原へ誘った。
野原に行った私達は一万円札を拾った。
見つけたのは友達だった。
半分こしようと友達は言ったが、五千円なんて大金は持っていなかった。
私はとりあえず五百円貰い、家へ帰った。
その夜、母が置いておいたお金がなくなったと言っていた。
「桜と夕花が盗ったんでしょう！？」
そう決め付けられた。
母は私の話を聞いてくれようとはしなかった。

この頃から、記憶にある母は何かあると悪いのは全て私だと決め付けて怒るようになった。
そして、何を言っても怒られると思った私は誤魔化すことや嘘を覚えた。

独り

クラスで話をしていた。
まだ幼かったためか、親にあまり手をかけられずに育ったためか、
リアルな夢を現実だと信じ込んで夢の話をしていた。
「私の家の階段下から異世界に行ける」と。
それを確かめるためにクラスメイトが家に来た。
いつも家には人がいない。
だからこそ出来た事だろう。
そして、当然と言えば当然なのだが、階段下は普通の物置だった。
クラスメイトは怒る事なく帰ったが棚の上に置いてあったお札をこっそり持ち帰っていた。
私は気付かなかった。

そして次の日から、私は鍵の掛かった家の前で姉の帰りを待つ事になった。
毎日誰もいない玄関先に座り込み、学年が違うために帰りが遅い姉を一人ぼんやりと待つ。
そのうち私を可哀相に思った姉が家の鍵の隠し場所を教えてくれるまでそれは続いた。

ある日、母の手伝いをしていた。
姉はまだ学校へ行っている時間帯だった。
慣れない手伝いに怪我をしてしまった。
母は、たまに手伝いをさせると怪我をする、と文句を言った。
それ以来手伝いも頼まれなくなった。

姉は友人と遊んだり、近所の家に寄り道してはお菓子を貰ったりしていた。
私は信用がなかったのだろう。
友達と遊ぶ事すら母は顔をしかめて許してくれなかった。

そしてぼんやりと時は流れていく。

小学校高学年になった頃だったろうか？
私が小さい頃から単身赴任だった父と、一人で子育てをしなくてはならない母のケンカが増えていった。
「お前がいるから離婚できない。」
度々母に言われた言葉だ。
この頃には私を名前で呼ぶのは姉だけになっていた。
母も兄も、私の事はチビと呼んでいた。

家の中が酷く荒れていた。
家族のケンカに、気付くと包丁が出ているのだ。
幸い誰もそれで怪我をする事はなかったけど。
殴る、蹴るは当たり前だった。

宗教

中学に入った頃、母が宗教に入った。
私は宗教とか苦手だったけど、母がそれまでよりも楽しそうだったからとめなかった。
家族の皆がそう思ったのか、誰も母の宗教通いをとめることはなかった。

「桜も入りなさい。」
そう言われて、それで母の心が軽くなるならと私も宗教に入った。
きっと母は心が疲れていたのだ。
何かに縋りたかったのだろう。
だから、しばらくは我慢した。
月に一度、道場、と呼ばれるところにも行った。
姉も、兄も。
父以外全員が宗教に入った。
母を除けば熱心な信者なんて一人もいなかったけど。

大学に通うようになり、一人暮らしを始めた。
宗教で渡されたお守りは持って行ってたけど、部屋に置いたままだった。
普通は、常に身につけておくらしいが。

きっとこのまま、誰か適当な信者と結婚させられるんだろう。

そう思っていた。
でも、初めての一人暮らし、初めて仲間が出来た幸福に未来を望むようになった。

母の思い通りには生きたくない。
そして、その後の帰省の際に実家にお守りを置いてきた。
代わりに貰ったのは母の言葉。

「おまえなんか死んだ方が良い。どこにでも行け。」
宗教を辞めた人は皆一ヶ月くらいで死んでるんだ。
お前もすぐに死ぬよ。」

お母さん、私は邪魔ですか？
うんと苦しんでから死ねば良いって言ったのは私よりも宗教が大事だからですか？

言葉は外に出ることはなかった。
出たのは涙だけだった。

後々、愁にこの事を話すとお母さんも人間なんだから。誰だって間違ってしまう事はあると言ってくれた。

健太

大学へ通い始めて一週間。
研修で仲良くなった友達と笑い合う日々。
初めての自由に、初めての仲間に、私は幸せだった。

「桜、どうする？金曜だから遊んでいくか？」
そう聞いてきたのは健太。
新潟出身の彼は、グループで一番体が大きい。

私と健太は皆を誘って大学の近くの臨海公園へ行った。
適当に皆に声を掛けると、初めて一人暮らしをする子が多いせいか
結構な人数が集まった。

暖かな陽射しとは裏腹に、まだ風は冷たい。
それでも皆といるので心は温かい。
流石に男女混合で１０人以上いるので行動はバラバラだが。

海に行った帰りに、そのまま皆でご飯を食べた。
もんじゃ焼きだ。
幸い健太が作り方を知っていたので、皆教えてもらった。
初めて食べたもんじゃ焼きはとても美味しかった。
猫舌なのが残念だが、気をつけて食べればやけどはしない。

「マズイ、、、有機化学が全く分からない。。」
皆と楽しく過ごしているうちにテスト期間が迫っていた。
講義は毎回出席しているのに、全く理解できない教科があった。
６０点以上取らないと赤点なのに。

テスト一週間前から、それまで以上に猛勉強した。
ガリガリ音がしそうなくらい。

「桜が好きだ。付き合って欲しい。」
なんとかテストを切り抜け、夏休みまであと一週間になった頃。
健太に告白された。
大切な仲間。
初めて居心地がいいと思った場所。
だからこそ、それまでの関係を壊したくなかった。
仲間でいたかったから、断った。

健太（後書き）

桜の生活にも陽が差してきたと思ったのですが、雨が降りそうな感じですね。
でも、今までが重すぎたので今後は幸せになるかな？

本当の私

「皆、本当の私を知らないのに。
どうして表面だけ見て好きだなんて言うの？」

涙と共に溢れる言葉。
健太の告白を断った後もグループの男の子達から告白された。
段々「誰が桜を落とせるかゲーム」みたいになっていった。

仲間との居場所をなくしたくないと言ったのに、誰もそんな事に耳を傾けてくれない。
サークルの仲間にも告白されていた。

でも、皆本当の私を知らない。
普段は明るく、誰とでも分け隔てなくしゃべっていたけど。
本当の私は親にいらないと言われた子供なのに。

段々私はグループの子達と疎遠になっていった。
笑うことも減っていったが、それでも勉強だけは続けていた。

「今日もシャワーで済まそう。面倒だし。」
サアッ、パラパラパラ。
「あれ？？」

アパートの廊下に面した場所にバスルームがある。
大家の趣味なのか、ご丁寧に窓までついているのだが。
曇りガラスを何枚も重ねたような形状のそれの向こうに誰かがいる

気がする。
「でも、窓は全然開けてないし。。見えないよね？」
呟きは水音にかき消される。

翌日、シャワーを使おうとしたが、なんとなく気分が悪い。
バスルームの窓が完全に閉まっている事を確認してから、服を着たままシャワーを出す。
そのままくるりと方向転換し、すぐ隣の玄関へ行った。
覗き穴で確認してみると。。

「うっわ～、完全に覗きだ、、、。浪人生って感じ。」
そんな事を考えている一方でとても怖い。
一瞬バスルームからお湯をかけてやろうかと思ったが、後々復讐されたら怖い。
いつもシャワーを使う時間なんて決まってない。
きっと付近の住民だろう。

その日から、シャワーは朝の忙しい時間帯に浴びることにした。
それなら覗きに来られないと思ったから。

変態

「これです。見てください。」
桜は学生課に来ていた。
一枚のレポート用紙を手にして。

「うわっ、これは酷い。
火事になったらどうするんだ！？」

桜が手にしていたレポート用紙にはくっきりと煙草を押し当てた跡が残っていた。

「昨日、新聞受けがなんだか動いているように見えて。
玄関まで見に行ったら、外から新聞受けを押して中を覗いてる人がいて。
怖かったんですけど、覗かれるのが嫌で中から指で押したら押し返されて。
仕方なくコレを貼って、今朝見たらこうなってたんです。
先日は、シャワーを覗かれてて。」

学生課の人達は、表札を連名にしたり男物の服を洗濯して男と住んでいるように偽装したら？と言ってくれた。
警察に連絡できたらその方が良いのだが。
桜は固定電話も携帯も持っていなかった。

「変態に縁があるのかなぁ？」
こっそりと呟く。
覗きだけが原因ではない。

桜は生活費を稼ぐためにアルバイトをしているのだが、帰り道に出るのだ。
もちろんオバケじゃない。
ある意味もっとタチの悪い変態だ。
夏場はほぼ毎回付いてくる。
ニタニタ笑いながら気味の悪いおっさんが。
桜が走るとおっさんも走る。
逆にゆっくり歩くとおっさんも歩調を落とす。
自転車で追いかけてくるヤツもいる。
急ぎ足で大通りからアパートへ続く道へ入り、後ろを見るといなくなっているのだが。
次の道で曲がって先回りされた事もある。
不幸中の幸いと言うべきか、追いかけられるだけでそれ以上の事はされない。
でも、それでも桜にとっては恐怖以外の何者でもない。

変態（後書き）

文体が変わってきちゃいました。。
素人なので暖かい目で見守ってやってください。

電話

「お疲れ様でした～。」
「乾杯！」
「かんぱーい。おつかれっす～。」

大学にいる間に取っておいた方が良い資格試験。
そのテストが今日終わった。
桜は久々に皆に誘われ、グループの飲み会に行った。

実はお付き合いを断った男の子が何人かいるのだけど。
気まずいので、彼らとは話さない。
その代わりに、最近疎遠になりつつあったグループの女の子達と話していた。

「まぁ、平気かな。全く話しかけて来ないし。」
お付き合いを断った子の中に一人、結構しつこい人がいたのだ。
断ったのに、駅で待ち伏せされた事がある。
今好きな人がいないなら自分と付き合えと無茶を言われた事もある。
「好きでもないのに付き合えないし。。」

そいつ、山本彰人（あきと）は桜がほとんど笑わなくなってから、やっと諦めがついたのか、彼女を作ったらしい。
それを聞いた事もあり、桜は打ち上げの参加を決めたのだ。
それまではなるべく別のグループの女の子と行動を共にしていたのだが。

ＲｕＲｕＲｕＲｕＲｕＲｕＲｕ～
ＲｕＲｕＲｕＲｕＲｕＲｕ～
ガチャッ
「只今留守にしております。ご用の方はピーという発信音の後にメッセージをお願いします。
Ｐｉ－－－
もしもし、今からそちらに行く。
ガチャッ
ツーツーツー
メッセージをお預かりしました。」

「嘘。。なんで??」
打ち上げの翌日。
気持ちの良い天気だったので、桜は昼間出かけていた。
そして、帰宅して手を洗っていると、電話が鳴った。
のんびりと呼び出し音を聞いているうちに留守電に切り替わった。

電話を掛けてきたのは山本彰人だった。
覗きが怖くて、バイトしたお金でやっと買った電話の番号は山本には教えていない。
アパートの場所も住所も教えていないのに。
その上、最近は全く話していない。
打ち上げでも、こちらを見ることもなかった。
それが、桜が帰宅すると同時に電話を掛けてきた。
「どうしよう。。帰ってくる所を見られてた?」
桜は、アパートの鍵と財布を持って、すぐに外に出た。

さまよう

家を出たのは良いが、行くところがない。
しかも、、、

「うっわ～っ、６００円しかない。。
コートも忘れて来たし。
皆遠くからから通ってて、近所で一人暮らししてる子もいないし。
どうしよう？」

いくら真冬で変態が少ない時期だとは言え、一人で歩いているのにも限界がある。
日付も変わろうとした頃、桜はやっと目的地を決めて歩き始めた。

ピンポーン

「おっ、どうした？こんな時間に。」

その部屋から出てきたのは雅人（まさと）。
桜のサークルの仲間だ。
一度告白され断った事があるので、気が進まなかったが。

「ごめん、夜遅くに。
悪いんだけど、今日泊めて貰えないかな？
山本がストーカーっぽくなっちゃって。

急に電話が来て、今からアパートに来るって言われて。
怖くて帰れない。」

招かれて、室内に入る。
男の一人暮らしらしく散らかっている。
雅人は遅くまで話を聞いてくれた。
何もしないから大丈夫だよ、と言ってくれる。

「雅人、ありがとう。
急に来てごめん。
本当にどうしていいか分からなくて。
皆自宅生だし、遠いし。」

雅人がいて助かった、と続ける桜に雅人は茶目っ気たっぷりに言葉を返す。

「いいって、いいって。
なんだったら今夜も泊まるか？」

雅人のバカ、エッチと返して、もう一度お礼を言って自分のアパートへ向かう。

ガチャッ

部屋に入るとまたもや留守電を伝えるランプが点滅している。

ピッ

「現在一件の伝言をお預かりしています。
伝言を再生します。

Ｐｉ－－－
畜生、ふざけんなよ！
馬鹿にしやがって！
覚えてろよ。

ガチャッ
ツーツーツー

メッセージを消去しますか？
消去する場合は＃を、保存する場合は＊を押して下さい。

メッセージを消去しました。」

山本の声だった。

さまよう（後書き）

最後までお読み頂き、ありがとうございます。

なんだか長くなりそうな予感です。

上手く一話の桜の呟きまで進める方法はないかしら？？

新学期（前書き）

著作権は放棄していませんのでご注意ください。

新学期

春休みなんてあっと言う間に終わった。
明日から新学期。
最後の一年間。

「いやだな〜。山本に会うの怖い。」
一人で呟きながら。
それでも学校に行かないといけない。
せめてクラスが違うと良いんだけど。。

「うわっ、同じクラス！？最悪。。
しかも席が隣の教科あるし。」
嫌々ながら、教室に入る。
ほっとした。
まだ山本は来ていない。
チャイムが鳴って、先生が入ってきたけど。
山本の席は空いたまま。
どうやら今日は休みらしい。
ちょっとだけ安心しつつも一日を過ごす。
そんな日が一週間ほど続いた。

「え〜、誰か山本の行方を知ってる人がいたら教えてくれ。」
珍しく学科長がやってきたホームルーム。
先生方の口から出たのは「行方不明」の四文字。
でも、それってやばいんじゃない？
私闇うちされそう。。
不安を抱きながらも、あっと言う間に季節が流れていった。

「終わった～。
この講義、取らなければ良かった。。
なんで夏休みに特別講義なんてあるんだろ？」
山本の事なんて忘れかけていたある日。
帰宅すると一枚の葉書が届いていた。

山本からの暑中見舞い。
怖かった。
文面はいたって普通のもの。
「またな。」なんて書いてあるのも、本来なら怖くないハズなのに。
それが山本からのってだけで、私にとってはとても怖い文面。

「学科長、これ山本からきたんですが。」
そう言って葉書を学科長に差し出す。
行方不明になっていた山本の現在の所在地もきちんと書いてあったから。
その後はどうなったか知らない。
私はあえて聞かなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1260d/

闇桜

2010年10月22日21時13分発行